

ロス)を十分に、ソ連のたばこは日本と反対で、吸い口が長く、たばこの方が短い。厳寒で皮手袋のためである。れんが工場へ材料取りに歩哨とラクダで(双こぶ)初めにラクダに乗った。名前のとおりラクダでした。ラクダは牛、馬と違い、前後肢を折りたたむようにして座り、人が乗れば立つ。その後、歩哨とも顔見知りになり、夕方には山本君の小舎に行き、白パン、たばこを時々仕入れに行き、友と分かち、二か月ほど、十分な腹でした。別の工場に移動したが、ナホトカで面会し、同じ船で帰国。

ソ連抑留体験記

和歌山県 上田 宗雄

終戦から入ソ当時の苦勞

昭和二十年八月十五日正午終戦の紹勅を、奉天憲兵隊本部前広場でラジオ放送にて知り隊員一同ぼう然とする。あとで聞いたのであるが、本部長鎌田大佐は即刻自決された。

武装解除は二日後ソ連軍により実施され、北陵の通信隊跡に收容される。当時の隊長は中山要三大尉(佐賀県出身)で入ソ後も一緒に苦勞をともにした。同年十月末奉天出発、第二十大隊稲葉大尉に所属し日本に帰国とだまされ貨車に乗せられ満州北端の黒河經由で、ブラゴエシチュエンスクの部落に渡る。松花江には仮橋が架けられ、みぞれの降る夜間で方角もわからなかったが、とにかく寒さにふるえた。翌日また貨車に乗せられウラジオストック經由で帰国だとだまされ二昼夜くらいたったころ、食事給与ということで当番が受領で出たときに窓越しに外を見ると駅名がチタとするられていることを知り、全員西部に連行されていることを知る。

二日後、ノーボイリンスカヤという小さな部落の駅に着き、雪の上には下車約一時間くらいで收容所にはいる。一面の雪野原ではるか西方に五十戸くらいの部落のあることを知る。ここでの作業は山林の伐採、シパルザボード(枕木製材工場)、バランチールカー(まき割り)、貨車へ原木の積み込み等々であった。食事は約三百グラムの黒パンにスープ、燕麦(馬の飼料)、大豆等いずれも

腹三分でなれない作業と寒さのため栄養失調で次々と友の倒れるのを目前に見て、またこの人たちを土葬にしたこともたびたびだった。

飢餓生活極限の情況

「食べたい何でもいから腹いっぱい食べたい」。全員これ以上に思うことがなかった。三百グラムの黒パンの分配時ともなると、とまり木の上から班員三十余人の目は当番のパンを切り、目方を計り甲乙のないようにするのを、穴のあくほど見入ったものだった。少しでも一かけらでも他の人より多く食べたい気持ちは全員の気持ちであつたろうと思う。春になり雪解けの後にいっせいに芽を出す雑草の若芽をつんでは持ち帰り、収容所内のあちこちで煮る姿は夜中までも続いた。味つけは岩塩、なべは飯ごうだ。また秋九月には山林一帯に生えるキノコをとってきてはこれまた飯ごうで煮る。こんなふうに厭しい作業の合い間を見ては食べるものを探すが常習だった。

こんなにして毒草、毒キノコなど食べ下痢し栄養失調になった人たちが多かった。私も枕木工場で左手中指を

怪我し医務室で爪をはがして治療を受けたとき、体重は何と四十八キロまでになっていることを知りガク然としたが、軍医の計らいで炊事の雑役に回してくれ、やっとの思いで元気を回復した。炊事の雑役中にソ連倉庫に主計大尉（堤さんといって山形出身）に引率され車を引いて出かけた。糧秣を受領して帰る途中、だれが落としたのかバレイショが山なりで落ちていたので大尉に報告すると、拾って帰ろうということになり、カチン、カチンに凍ったバレイショをから袋に入れて持ち帰って暖かい部屋に入れると、何か変な臭いがしてきたので皆で調べたところ、拾ってきた芋は何と馬糞であつた笑い話もある。

このように、何でも食べたいときは馬糞も馬鈴薯に見えたのである。またつらいことは食物だけではない。シラミ、南京虫にも大変つらかつた。着物の縫い目は白いくらいの卵で毎晩ポリポリとシラミ取りする姿がとまり木全部だった。また南京虫は木のすき間に巣くい、暖かくなるとかみつかれ寝不足になったこともある。帰国後着て帰ったじゅばんの縫い目にシラミの卵かすがあるの

を父母が見て泣きながら焼却した。

労働の実態、ノルマの状況

使役は毎日零下三十度までは狩り出され、病人以外は出役させられた。病人でも熱がなければヒートリ（ずるい）だと言って、足腰が立てばかなりの重病人でも出された。神経痛のように、いくら痛くとも熱のない人は気の毒だった。作業にはすべてノルマがあり、一〇〇％遂行しなければ三百グラムの黒パンも二百グラムになり、さらに何も出ないことすらあった。これは個人ではなく作業班全体が対象となっていた。

帰国近くなるころ、一か月一〇〇％遂行した班員には、一人百五十ルーブルの金を支給されたことがあった。ノルマは何をどれだけということだが、何を基準として定めたかはわからなかった。

統制管理の実態、洗脳の実態

民主活動は最初は壁新聞から始まったようである。収容所内にごごからとなく転属してきたオルグによって、日本国の今までの歩みをことごとく理解に苦しむほど反対の意見をふれ回し、自分たちがだまされていたことを

宣伝した。そのころになって「ソビエト人民の歩んだ道」という本を全員で回し読みもさせられた。

我々憲兵も批判的でちょっとでもこれに反発するとすぐ反動としてつるし揚げられるので、上べだけでも一応理解したようにしなければならなかった。それと帰国後においては必ず日本共産党に入党するということが前提のようだった。

ナホトカや引揚船内の状況

だまされ通した四か年の抑留生活で彼らの言うことはだれも信用しなかった。やっとたどりついたナホトカの収容所内にも民主運動の波はよりひどいものだったが、船に乗るまではとじっとこらえた一か月ほどだったが、特別な作業へは出されなかったが、過去の取調べは一段と厳しかったが、一応民主主義をかみしめたように見せ、がまんした。

やっと乗船命令が出て、足取り軽くタラップを登ったが、船が運航されまでは心細かった。恵山丸がいかりを揚げ、港の外に出たときは今までしいたげられた者同士、万歳を心の中で叫んで、航海中はただ故郷の話で持

ち切りだった。二昼夜の航海で舞鶴港に入港したが、一部グループ（民主）が船員が自分たちの米をごまかしたということ（事実不明）で船からおりることを拒み、全員を道づれとして一昼夜ほど上陸が遅れた。やっと上陸できたときのうれしさ、迎えてくださった皆様の温かいまなざしは何とも言えない。

上陸後宿舍内で赤飯をいただいたそのときの舌ざわりの米の飯の味は、現在の何でもある食物の中にあって、この味に追いつくものがない。

シベリア抑留生活の苦勞

新瀨島 関本 清

入ソ初期の苦勞

我が部隊は九月二十七日四平街昌図で武装解除され、四平街十五作業大隊を編成した。ウラジオストック經由で日本へ帰すというソ連の言葉を信じ貨車に乗り込んだ。貨車輸送の途中糧秣廠のところで列車を停止させ

「日本へ帰れば何もいからでできるだけ持って帰った方がよい」というソ連の言葉をまに受け、各中隊から使役を出して糧秣を空車に積み込んだりもした。

十一月三日黒河省孫呉に到着、アムール河の結氷を待ち二十八日よいよアムール河結氷。「貨車の物資を三十日までに運べ」というソ連の指示により、各人は飯を食うときと便所に行くとき以外それこそ昼夜休みなく手製のそりやブリキ板を利用して対岸のブラゴエシチュenskまで運んだ。

十二月一日、ブラゴエシチュenskを出発、列車はいよいよウラジオストックに向かって進むはずであったが、途中で進行方向が違うのに気がつき大騒ぎとなる。

列車はまる四日走って着いたところはバイカル湖の少し手前のウランウデという小都市であった。向こうを見ると有刺鉄線を張りめぐらせた収容所が冷然とかまえていた。

日もとつぷり暮れたころ物資の車おろしも終わり収容所内の大きなドームに入れられ、私物検査を受けた。全員の検査が終わったのは午後の十時を回ったころだっ